

ばんけい

教育ほつとにゅーす
かわら版こみち
教育の小径No.68
6月号
2014 June

今月のことば

はやお さんもん たく
早起きは三文の得

朝早く起きると、何か良いことがあるということです。早く起きることを奨励しているものです。「得」を「徳」と書くこともあります。



国士舘大学教授
北 俊夫先生

給食の時間に「心の教育」を

- 子どもが楽しみにしている給食の時間は、健康づくりに貢献しているだけでなく、子どもの心を養う貴重な時間でもあります。
- 給食の時間は、「人々や生き物に感謝する心」・「物を大事にする心や態度」・「伝統や文化を尊重する心」や「食事のマナー」などを育むことができます。

今月の記念日

小さな親切運動スタートの日
(6月13日)

昭和38年(1963年)のこの日に「小さな親切」運動の本部が発足しました。東京大学の当時の総長が卒業式で「小さな親切」を訴えたのがきっかけでした。

給食の時間は「心を養う時間」

いま道徳教育の充実が課題になっています。道徳教育の要である「道徳の時間」を充実させることはもちろん大切です。思いやりの精神や生命尊重、規範意識や社会性などを養うためには、さらに新たな指導場面が必要ではないかと考えます。

各学校では、年間約180回にも及ぶ給食の時間があり、子どもたちの学校生活にすっかり定着しています。1回の給食時間を約45分間とすれば、年間の時数は180単位時間になります。これは国語科(1~4年)の年間授業時数に次いで多い時間です。

学校給食には次のような特質があります。基本的にはどの子どもも同じものを食べます。配膳や準備、後片付けなどは学級の中で分担して行われます。子どもたちは食べるという実践活動を毎日楽しみにしています。栄養やカロリー一面においても配慮されています。

学校給食の時間を健康な体づくりのためだけでなく、教育的に意味のある場として捉えることはできないでしょうか。文部科学省は、日々の教育活動の中で学校給食を「生きた教材」として活用することを奨励しています。

いま道徳教育の充実が叫ばれていますが、学校給食の時間を「心の教育」を

担うもうひとつの場として活用する取り組みを重視したいと考えます。給食指導は、子どもの体の健康づくりに貢献しているだけでなく、心を豊かにする役割を担っているからです。

「心の教育」の具体例

給食を食べる前には、必ず一音に「いただきます」の挨拶をします。「いただく」とは食べたり飲んだりする行為や物に対して謙譲の意思を表すものです。謙譲とは、自分の動作をへりくだって表現することであり、そこには尊敬の念や感謝の心が込められています。

尊敬や感謝の対象は、栄養教諭や学校栄養職員、食材を生産したり運搬したり、さらには給食を作ったりしている調理員など給食を支えているさまざまな人たちです。もちろん配膳や準備、後片付けをしてくれた学級の友だちや先生への感謝も含まれます。

生き物に対して、感謝の心をもたせることもできます。私たちは、命のあったものの命を断ち切って食べ物として食べています。まさに生き物の命をいただくわけです。

このように、学校給食の場では、さまざまな人々や生き物に「感謝する心」を育てることができます。

先生方は給食の時間に、「残さずに食べましょう」「味わって食べましょう」

「食器やお盆、箸などは丁寧に扱いましょう」などと、子どもたちに声をかけています。これらはいずれも食べ物や食事に使う器具など「物を大事にする態度や心」を育てようとしているものです。

給食の時間にも「もったいない」の言葉がたびたび使われます。食べ残しや飲み残しをすると、まだ食べられる状態のものを捨ててしまうことになります。ですから、「最後まで残さず食べるように」と指導しています。もちろん、その日の体調によって最後まで食べることができない子どももいます。また、食物アレルギーをもつ子どもなど、一人一人の状況に応じた適切な指導も求められることは言うまでもありません。

給食の献立に、地域の郷土料理や行事食が上ることがあります。これらの献立から、地域の食材が使われていること(地産地消)や、先人の知恵や工夫を学ぶことができます。郷土やわが国の伝統と文化を食生活や食習慣の側面から理解させ、それらを尊重しようとする意識や態度を育てる機会になります。

これらのほかにも、給食の時間では「食事のマナー(行儀や作法)」を習得させ、友だちとのよりよい人間関係をつくることができます。

このように給食の時間は、子どもたちに豊かな心を養うことができる貴重な場だと言えます。

転ぶことも大切

「転ばぬ先の杖」ということわざがあります。しくじらないように、事前に十分な用意や準備をしておくことが大切だということです。「備えあれば憂いなし」と類似表現です。

私たちの人生は毎日が問題解決の連続です。すべての問題場面に十分備えることができればよいのですが、「すべての場面に」ということはまず無理でしょう。問題場面に遭遇したときやつまずいたときにどう対処するかが問われることになります。こうした場面から逃げ出したりしては、主体的に生きていくとは言えないからです。

いつもおとなが先回りして、問題を解決してしまったり、つまずかないように事前に「杖」を差し出したりすることが本当に子どものためになるかということです。時には子どもに転ばせることも必要ではないでしょうか。

転ばせるというと、そのような教育やしつけがあるのかと言われそうですが、ここでいう転ばせるとは「失敗」を味わわせることです。私たちは失敗を繰り返しながら成長していくものです。「失敗は成功の母」と言います。

失敗させる程度がポイントです。少し努力すればクリアできるもの、少し工夫することによって成功するものが良いでしょう。スモール・ステップで適度な失敗を体験させます。失敗に再度挑戦させながら、徐々に達成感と自信を味わわせ、自らの成長や進歩の証しを実感させたいものです。



土曜日の教育活動

文部科学省は、土曜授業が教育委員会の判断で実施ができるように、学校教育法施行規則を一部改正しました。これには、土曜日においても子どもたちに充実した学習機会を提供しようというねらいがあります。

土曜日の教育活動については、文部科学省から次のような形態が「参考」として示されています。

- ① 土曜日に教育課程に位置づけた教育活動を行うもの。「土曜授業」の実施の主体は学校です。子どもたちに代休日は設けられません。
- ② 学校が主体になりますが、希望者

を対象に実施するもの。教育課程外の活動になります。「土曜の課外授業」と呼ばれています。

- ③ 教育委員会や地域のNPOなど民間が実施するもので「土曜学習」と呼ばれるもの。希望者に対して学習等の機会を提供するものです。

①や②の授業には教師がかかわりませんから、教師の代休のとり方など勤務のあり方が課題になります。

日本教育新聞社が、全国の市区町村教育委員会を対象に昨年末に実施した調査によると、教育課程内の土曜授業を「増やす」が29.6%、「現状維持」が56.2%だったといます。「土曜授業」がどのように推移していくのか。今後の動向が注目されます。

コラム 北 俊夫の「3.11」体験談(8)

翌朝／モノレールは運行

翌日はモノレールの乗り場に急ぐ人の足音で目が覚めました。お借りした毛布をたたんで、すでに積まれているところに持っていきました。毛布はいずれも、お礼の気持ちを表すかのようにきちんとたたまれました。

モノレールの「羽田空港第2ビル駅」の改札口に行くと、「正常運行」と掲示されていました。このとき、モノレールから乗継ぐ山手線や京浜東北線などのJR在来線はまだ運休でしたが、少しでも自宅に近づこうと思い長蛇の列の後ろに並びました。

5時11分の始発列車は、すでに出発した後でした。次の5時21分発の改札が始まり、200人位が入ったところ、私の前でストップがかかりました。「おかしいな。まだ乗れるはずな

のに」と奇妙に思いました。次の32分発の改札が始まり、やはりホームに誘導されたのは200人程度でした。

ホームでは、浜松町駅に向かって後方の2両に乗るよう指示されました。前方の4両は空いたままです。このことの意味は、次の「羽田空港第1ビル駅」に到着したときわかりました。ここでは3・4両目に乗客を乗せたのです。そして、次の「国際線ビル駅」では1・2両目に乗せました。これは素晴らしい対応策だと思いました。混乱させることなく、平等に乗車の機会を設けているからです。3つの空港ビルではそれぞれ1万もの人がひと晩を過ごしたことを後で知りました。

モノレールの中では立ったままでした。冷や汗が出てきて異常を感じ、床にしゃがみ込みました。思えば前日のお昼から飲まず食わずだったのです。

INFORMATION

てのひら文庫

文部科学省後援 「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール 作品募集!

子どもたちの小さなてのひらに載せられ、あたためられ、随所に持ち運ばれ、そして、くい入るように読破してもらいたい。

—そんな願いがこめられた読書教材です。

- 総監修 児童文学作家 石森延男
- A5判 16~28ページ
- 4色・1色
- 1~6年 各12冊
- 学校納入定価 1冊160円(税込)



編集後記

「得意教科は給食です」と冗談を言う子どもがいます。しかし、給食での挨拶、配膳などの日常行為は、無意識に人間形成にプラスの影響を与えていると思います。3月に「中国人教師が日本の小学校で赤面」と題した学校給食についてのブログが、話題になっていたのをふと思い出しました。(T記)



企画・編集：ぶんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2014年6月1日